終戦記念の日には

市川司幸（いちかわつかさ）

間もなく魂になるだろうマツシタノバアが無事に成仏できるよう、作り物でもいいから「ヘーカ」を呼ばなければならない、というのがその日の夜の寄合で決まったことだった。その翌晩に再び寄合が開かれ、区長どんが持って来た日本酒を車座に酌んだり飲んだりしながら、山深いこの地区でいちばん「ヘーカ」に顔が似ているという、黒眼鏡のサカイノジイが変装をして死に際のマツシタノバアに会いに行くことに決まった。当のサカイノジイは、酒が弱いくせに他の衆に次々と酒を注がれ、酩酊しほとんど記憶がなかった。

翌朝、目を覚ましてサカイノジイが困ったのは、彼自身がマツシタノバアの呼ぶところの「ヘーカ」を知らなかったからである。サカイノジイは生れたときからこの地で息をしている村の衆の中では珍しく、三十代になって他所からやってきた人間だった。マツシタノバアの家からは川を挟んで向かいの場所だったが付き合いはなかった。

「ヘーカ」というものが、「天皇陛下」と異なるものであるというのは、サカイノジイも理解していた。マツシタノバアは終戦の直前に旦那と子どもを亡くし、それから気がおかしくなった。マッカーサーとの並んだ小柄な日本人の写真も、「人間宣言」なるものも一切信じず、一九四七年八月十五日に隣村に天皇が行幸したときも、誰が天皇なのかわからずに天皇本人の前で「陛下はどこか」と喚いたこと。それからというもの、毎年のように終戦記念日になると駅に出かけて、今年こそは、今年こそは、と「ヘーカ」に会いに行っているということ。つい先日病を得て、おそらくそろそろぽっくり逝ってしまうのではないかということ。すべて彼女を古くから知る者たちから聞いたことである。ぼやっと輪郭が見えるものの、詳細が掴めない。まずはマツシタノバア本人に「ヘーカ」の正体を尋ねなければならない。「ヘーカ」は、彼女以外には見えない。国民学校の教科書で見た、神話風の人物かもしれないし、蛙かもしれないし、怪物かもしれないのである。

普段はクロスワードパズルを解くのに用いるポケットタイプのメモ帳とシャープペンシルを持って、サカイノジイは隣町の病院に行くバスに乗った。村から病院までは三十分ほどかかった。隣町の病院は、人口の少ない郡の患者を一手に引き受ける大病院で、さながら城の如くだった。

マツシタノバアの病室は、病院の四階にあった。廊下から見るとほかの病室はどこも複数の患者がいたにもかかわらず、マツシタノバアの部屋には彼女一人だった。

「ほんの二週間前まではもう二人いたんですけどね」

案内の看護師が言った。

マツシタノバアは部屋の隅で窓の外を眺めていた。

「松下さんお久しぶりです、酒井ですが。お元気ですか」

マツシタノバアはのっそりと彼のほうを見たが、しばらく何も言わなかった。視線はサカイノジイの瞳をしっかり捉えていたが、何も言わなかった。目の前の老人が誰なのかを理解できていないようだった。病を得る前から、二人の間での会話はほとんどなかったも同然だったから、忘れられて当然といえば当然だった。サカイノジイは病院側に、マツシタノバアの友人として面会を許可されていた。隣で二人の間の沈黙を見守る看護師が今どう思っているのか、サカイノジイは気になった。不審に思っていないだろうか。そこでサカイノジイは切り出した。

「晴れた日は川を挟んで互いに洗濯物を干しているのを

お目にかけましたが、松下さんが入院されてからはそういうのもなくて寂しくてですね」
マツシタノバアはそこでこの老爺の正体を知ったようだった。
「ああ！　そのときはどうも」
サカイノジイの思惑通りになった。
しばらく軽い会話を交わした後、サカイノジイは何気なく例の話を始めた。
「松下さん、天皇陛下はほんとうに有難いお方でしたね」
「有り難いなんてものじゃないですよ、神様ですから神様。むかしの新聞は畏れ多くもヘーカを人間だなんて書きましたけどね、神様なんですよ。私はそう習ったんです。おっかあにね、『ヘーカをじかに見たら目が潰れる』って言われてるんです。わたしだけじゃない、みんなそう言われて育ったんです」
老婆の語気は次第に強くなり、しまいには喉に痰がつっかえて咳き込み始め、傍らの看護師がマツシタノバアをさすったが大したことはない様子。
「松下さんはいまどういった病状なんですか」
サカイノジイが看護師に尋ねると、二週間前に夕餉を誤嚥して、肺炎の初期段階になったが、高齢なのでこれから急に悪化する可能性があるとのことだった。
「わたしは今年も駅に行きますよ。今年こそヘーカはいらっしゃいますよ、必ず。病院なんぞでのんびりしちゃおれんです」
意気高らかに言ってのけるマツシタノバアを、「やめてくださいよ松下さん！」と看護師がとめる。老婆は自分よりも五十歳ほど若い彼女の忠告には耳も貸さず、むっと口を閉じていた。
見舞いも終わりに差し掛かった。かれこれ二時間ほど話したことになるが、わかったのはマツシタノバアのヘーカへの執着心と、ひょっとしたらほんとうに病室を抜け出して駅に行ってしまうのではないかと思うほどの気力だけだった。これではまずいとサカイノジイは思った。あとでヘーカの役を演じるのは自分なのだ。
「松下さん、ヘーカはどんな見た目なんですか」
老婆は即答した。
「あのままですよ、御真影のままです。でもあれは写真ですよ。本当のヘーカは神様なんですから、身体から光も出るし花のような匂いがするでしょうよ。ずっとむかしにヘーカがいらっしゃるのをみんなでお迎えしに行ったとき、そんな方は誰もいなかったです。写真と同じような見た目の人が通って、みんな、あれが天皇陛下だのなんだのいいましたけれど、あれはただの人間です、ものまねです。後光も匂いもないですもん。わたし確認したですよ、その人の背後に回って、背広の匂いを嗅いだですよ。うちの箪笥のなかと同じでした。偽物です、あれは」

翌日、サカイノジイは隣町のホームセンターで懐中電灯と芳香スプレーを買った。プラスチック製の飾り物や、パーティーで着るような安くて派手な衣装も購入した。家に帰ると、妻と一緒に隣の家のイイヅカノジイが待っていた。二人は縁側に腰を掛けて談笑していた。
「おお、ヘーカ様のお帰りだ」
イイヅカノジイが囃し立てると、サカイノジイはひどく迷惑そうな顔をした。いますぐにでもこの男に役を代わってもらいたいと思った。
「どうだ、松下さんは騙せそうか」
「わからん、どうにも正体がつかめん」
「ヘーカのか？」
そうだ、とサカイノジイはうなずいた。レジ袋に入った物を一通り床に広げてみせると、イイヅカノジイと老いた妻は無駄にキラキラした飾りを手に取りながら、まあ松下さんももうずいぶんと呆けてきてるしなあ、騙せるかなあ、と希望的な推測をした。
「飯塚さん、おれあ大人になってからこの村に来た他所もんでよくわからないんだが、松下さんは昔っからヘーカヘーカ言っていたのかい？」
「ああ、昔っからよ。でも、戦争の頃はそんなに気にならなかったなあ。変になったのは旦那さんと娘さんが亡くなってからだよ。テンノーヘーカテンノーヘーカってね、ぶつぶつ言ってんだ。念仏みたいだったよ。悲しかったんだなあ、俺の家は誰も死ななかったけどよ、大事な旦那さんと子どもを一気に失ったんだからなあ」
イイヅカノジイはその後も話し続けたが、話題はマツシタノバアのことから次第に競馬のことに移っていったので、サカイノジイはうんうんとうなずきながらも内心ではマツシタノバアについて考えながら、買ってきた芳香スプレーの包装を剝がしていた。

翌週になって再び寄合が開かれ、今度は酒はなく、普段ならば区長どんが座っている位置にサカイノジイが担ぎ出され、当の区長どんはサカイノジイの隣で終始薄い笑みを浮かべていた。恵比寿の顔の様だと誰かが思ったかもしれない。座布団の上に座るサカイノジイの前には、二日かけてこしらえた「ヘーカの服」が置かれていた。といっても、パーティーグッズの衣装に安物の飾りをまぶしただけのものである。その傍には、あのとき買った芳香スプレーが並べられていた。

「どうですか酒井さん、うまくヘーカになれそうですか」
区長どんが尋ねると、サカイノジイは首をかしげて、いやあどうでしょうね。
「実際に衣装を着て見せてくださいよ、そのスプレーもかけて」
老人のひとりが声を上げると、たしかに見てみたいものですな、酒井さんお願いしますよと水泡のような声が続き、仕方なくサカイノジイは衣装に袖を通し、その上から区長どんがスプレーをかけた。衣装を着てから、サカイノジイは軽く会釈をし、恥ずかしそうに立って見せた。それを見た村の衆の半分が吹き出して笑った。もう半分は、これで果たしてマツシタノバアを騙せるのだろうかという不安の表情を浮かべた。衣装をまとったサカイノジイが想像以上に滑稽だったからである。それは、サカイノジイの顔が天皇に似ているだけあっていっそうおかしかった。天皇が絶対になることのないだろう姿だったのだ。
「これは、松下さんに見せるものというよりは新年会の余興だな」
区長どんが手を叩きながら笑うのを横目で見ながら、困惑した様子でサカイノジイは
「これでほんとうにいいのでしょうか」
と皆に訊いた。
「わたしはいいと思いますがなあ、ああ、おかしくて腹が痛い。どうですかな、みなさんは」
区長どんが言うと、皆は一斉に笑い出しながらも口々に
「それでいいですよ」
と言った。
サカイノジイは再びマツシタノバアの見舞いに行った。今度は看護師が付いてこなかった。ひとりで廊下を歩いていると何やら騒がしく、そのうちに白衣の一群があわただしくサカイノジイとすれ違った。サカイノジイは群れの中心にベッドに乗った老爺がいるのを見た。容体が急変したのだと思った。マツシタノバアの病室に入り、ベッドの傍の椅子に腰かけると、
「あの爺さんはだめだろうね、もう三回目だ、ああして運ばれるのは」
と老婆は呟いた。
「わたしは今年こそヘーカを見るんです。もうわたしもだめでしょうから、来年はちょっと無理でしょうね。だから何とかして今年の終戦記念日にはヘーカを目に焼き付けないと」
「でも松下さん、これまで何十年間も、ヘーカは駅に来なかったのでしょう？　今年も来るかどうかわからないのに、それでも行くのですか」
サカイノジイが言った。
「いらっしゃらなかったらそれはもう仕方のないことです。それでもわたしは行かなきゃ気が済まないのです。きっと周りの人たちは煙たがっているやら、おかしがっているやら、それはわかりませんが、それでもわたしは行かないといけないのです。それは死んだ旦那やかわいい娘のことが忘れられないかもしれませんが、わたしには神様が必要なんです。悲しいことが続いたときは、みんな、神様にすがりたくなるものでしょう？　今度こそヘーカはいらっしゃいますよ」
それを聞いてからしばらくして、サカイノジイは「そうですな」と言った。マツシタノバアの答えを聞いて、彼はひとつの決断をした。「ヘーカ」になるのをやめよう。マツシタノバアにとってのヘーカは、ただ単に後光が差し、甘い匂いがするだけでなく、もっと深い場所、引き抜くことのできない記憶の中に根を張っている存在であり、自分がいくら着飾っても老婆の心を埋め得るものではないことを理解したのである。もし自分がそれっぽく変装したとしても、彼女の前では見抜かれてしまうに違いない。マツシタノバアにとってのヘーカは、結局、マツシタノバアの中にしかないのである。
帰り際、サカイノジイは振り返り、
「松下さん、終戦記念日にはきっとヘーカがいらっしゃいますよ。きっといらっしゃるでしょうな」
マツシタノバアはありがとうございますの代わりに小さく頭を下げて男を見送った。
家に帰り、布団を敷きながら、サカイノジイは明日の朝いちばんに区長どんの家に行き、自分にはヘーカを務めるのは無理ですと正直に言おうと決意した。サカイノジイの気持ちは晴れやかであった。翌日の天気予報は雨で、すでに屋根の上には雨雲が立ち込めているというのに、サカイノジイの内心はひどく晴れやかだった。

ところが、翌朝サカイノジイを揺り起こしたのはマツシタノバア危篤の報であった。目を覚ますと枕元には区長どんがおり、
「大変だ、松下さんがまた誤嚥した。もう肺が真っ白になってあと幾ばくもないそうだ。急いであの衣装を着てくれ、意識が途切れちゃう前に早くヘーカの姿を見せてやるんだ」
区長どんの来訪で飛び起きたであろう女房がすぐさま例の衣装を寝室に持ってきて、まだ目もはっきりしていないサカイノジイに着せ、横から区長どんがスプレーを吹きかけるとサカイノジイの身体はたちまち甘い匂いに

つつまれた。
サカイノジイの家の前には区長どんの車が駐車してあり、サカイノジイは後部座席に乗せられた。
「奥さん、旦那さんすこしお借りしますよ」
区長どんが言うと女房は従うままに「はい、お願いします」と頭を下げ、ようやく状況が呑み込めたサカイノジイは山道を下っていく広く大きな車体の揺れに任せていた。
車道は濃い緑色に包まれていたが、ついに景色が開け、車窓からは遠く病院が見えた。サカイノジイはますます焦ってきた。自分の思いとは真逆の方向にことが進みつつあるような気がしていた。
「区長さん、私思うのですが、私などが松下さんの望むヘーカになれるとは思わないのです。区長さんも先日私の格好を見て笑っていたではないですか、そうなんですよ、私は滑稽なんですよ。私なんかが軽々しくなっていいものではないと思うのです」
サカイノジイは思い切って、ハンドルを切る区長どんに訴えた。区長どんは驚くだろうとサカイノジイは思ったが、区長どんの背中はぴくりとも動かず、バックミラー越しに視線を向けることもしなかった。ただ、区長どんは大きなハンドルを握りながら、前を向いていた。
「区長さん、私も区長さんと一緒に病院に行きますが、この衣装は脱がせていただきます。緊迫した病院の方々にも失礼でしょうし」
「あほう、今マツシタノバアは生きるか死ぬかの瀬戸際なんです。言わば意識があるかどうかもはっきりしない人間が、ヘーカの本物偽物を判断することができると思いますか、酒井さん。その衣装を着たあなたを見た松下さんはとりあえずこう思うでしょう、ああ、ようやくヘーカにお会いできた、と。それが偽物かどうかなんて考える力はもうありません。その衣装を着た酒井さんがいるだけでいいんです。そのままでいなさい」
区長どんは語気を強め、震え声のサカイノジイを完全に圧倒してしまった。サカイノジイは再び口を閉ざしてしまった。しかし、それは彼の考えをも消し去ったわけではなかった。車の揺れの中でサカイノジイの内部も揺さぶられているようだった。
車は再び深い森の中に入り、車内は暗い世界になる。

終